

伝えること、 生きること

永井 愛さん



ながい あい／劇作家・演出家。劇団「二兎社」主宰。「言葉」や「習慣」「ジェンダー」「家族」「町」など、身辺や意識下に潜む問題をすくい上げ、現実の生活に直結した、ライブ感覚あふれる劇作を続ける。主な作品「歌わせたい男たち」「鷗外の怪談」「ザ・空気」など。

●演劇とコロナ禍

新型コロナの影響で公演が中止になるなど、演劇界にとってきびしい状況が続いています。演劇は人が密にならなければ成立しません。オンライン配信をすればいいという考え方は、最後の仕上げが観客によらないものになってしまいうす。観客の反応がフィードバックされることで、舞台がより豊かになるというのが演劇です。舞台は人間が出会うことによってしか成立しない芸術なのです。

芸術文化への支援のあり方をめぐっては、たとえばドイツのメルケル首相や、グリュッター文化相が発信した言葉と、日本の首相や閣僚の言葉には、だいぶちがいがありますよね。「芸術支援は最優先事項」「アーティストは必要不可欠であるだけでなく、生命維持に必要」としたドイツに対し、日本では当事者の運動が実って前進した部分もあります。文化芸術は不要不急、できるだけ支援という形では支出したくないというのが日本政府の本音でしょう。その一方で「国民に感動を与えたい」と、感染拡大

下でもオリンピック開催の準備は進めた。スポーツが感動を生むのと同じように、芸術も感動を生むものです。日本の首相や閣僚たちは、すぐれた芸術にふれてこなかったんじゃないか？ 国会答弁を見ながらそんなことを思っていました。

●他者になる芸術

文化や芸術について演劇評論家の松岡和子さんがとても素敵なおっしゃっています。ホームレスの方のダンボールハウスの前を通ったときに、ぬいぐるみやマスケットなどがぶら下げられていて、その光景に心打たれたそうです。寒さをしのぐだけであれば必要なのはダンボールだけです。けどそこになにかを飾りたくなる気持ち、これが生きるエネルギーなのだろう。芸術も同じようなものではないだろうか。食料のように直接命を維持するわけではないけれど、心を解き放ち、遊ばせることで、生命力の再生産に関わっているのだと思います。

演劇は、「他者になる」芸術です。人間はふだん、社会的に決められた枠のなかでしか生きられないし、自分の損得や

第1回・芸術と想像力

利害から脱して物事を考えることは難しい。けれど、芝居を見ている間は、「自分は○○である」という社会的な制約を一度取り払ったところで、登場人物それぞれの立場に身を置き、思いを馳せることができます。創る側も、見る側も、登場人物を通して自分以外の価値観を生きたことが演劇を成立させている要素です。そこから、他者への想像力が培われ、違う角度から物事を見るきっかけも生まれる。すぐれた演劇には、見た人の価値観や視点を攪拌し、リセットする力があります。劇場から出てきた人は、入る前とどこかが違う。世界が広がり、人間理解が深まっている。そういった経験をおそらくしていない人たちが、芸術文化を不要不急と言いつけるのでしょうか。国民不在の政治と芸術文化への理解のなさというのは、たぶん関係していると思います。それはたとえば、「LGBTは生産性がない」と言う与党議員の発言にも表れています。他者の立場に立って、共感的に理解しようとする想像力なしに人権感覚は育たないし、問題を解決する知恵も生まれません。